



オーディオテクニカ Brand-New SOLID BASS

新たな挑戦！ 重低音をカジュアルに

10年以上に渡ってベストセラーを続ける、低音重視のヘッドホン「SOLID BASS（ソリッドベース）」。「タイトな重低音」と「伸びのある中高域」はそのままに、コンパクトかつ軽量、おしゃれなカラーリングを纏い新風を吹き込む意欲作が、オーディオテクニカ技術陣が総力を結集したイヤホン「ATH-CKS30TW」だ。

文 海上 忍
Shinobu Unakami

「小さくてコンパクトなのに ディープかつキレのある重低音」

完全ワイヤレスイヤホンは、いまやスマホユーザーの必須アイテム。イヤホンの雄たるオーディオテクニカも開発に力を注いでいる。その意気込みは社内体制からも伺える。取材に応えてくれた4人のうち3人の所属は「BT開発課」。聞けば完全ワイヤレスイヤホンを含むBluetooth機器全般を専門に扱う部署とのこと。略称とはいえど部署名にBluetoothそのものを含めるオーディオメーカーは前代未聞。新製品「ATH-CKS30TW」にも期待が膨らむ。

ATH-CKS30TWは、人気シリーズ「SOLID BASS（ソリッドベース）」の新顔であり、キレのある重低音という共通のアイデンティティを持つが、切り口は新しい。佇まいが従来のSOLID BASSと違うのだ。まず目に止まるのが、サイズ感とデザイン。イヤホン本体は耳で存在を自己主張しない程度に小さく、充電ケースはデニムのコインポケットに入れられるほど薄い。カラー展開は4色、いずれもややくすんだ色合いでマット調の仕上がりだ。従来のSOLID BASSに顕著だったマニッシュさは影を潜め、シンプルさと柔らかみを感じさせる。

商品企画担当の永山氏に製品コンセプトを訊ねると、「SOLID BASSシリーズならではの重低音にコンパクトという要素を加えたかった」とのこと。特に充電ケースのサイズはオーディオテクニカの完全ワイヤレスイヤホンとして最小・最薄を達成したという。

ターゲット層も広がった。「音楽ジャンルや性別に関係なく、多くの方に重低音を楽しんでいただきたい」（永山氏）と語る狙いには、若年層は性別問わず重低音寄りの楽曲を好む傾向があるからだろう。昨今の音楽トレンドからすると、うなずける話だ。

設計にも抜かりはない。専用開発された「SOLID BASS HD TWSドライバー」は、2021年秋モデル「ATH-CKS50TW」の技術を継承しつつ、小粒なユニットに収まるよう大幅にリファインされたもの。「微細加工を使うなどして精密部品を作り専用ラインで製造した」（田久保氏）と、従来ドライバーと比較して大口径を維持しつつ徹底した小型化／薄型化を図っている。ドライバーの製造サンプルを従来モデルのものと比較してみたが、確かに薄い。イヤホン本体もオーディオテクニカの完全ワイヤレスとしては最軽量だという。イヤホン本体の小型化／薄型化は、携帯性向上だけが目的ではない。このサイズ感があるからこそ、耳穴前の出っ張り（耳珠）に干渉されず自然にイヤホンを装着できる「トラガスホールデザイン」を実現でき、さらには

完全ワイヤレスイヤホン

Audio-Technica ATH-CKS30TW



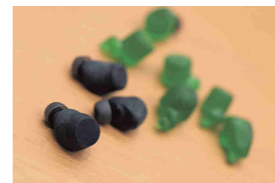
¥OPEN（直販サイト価格¥12,980／税込） ドライバーユニットの直上にアコースティックダクトを設けて、振動板を均一にダンピングさせて良質な低音を生み出している。開口部はメタルメッシュも組み合わせることで、IP55相当の防塵・防水仕様を実現しているのもポイントだ。

▶9mm薄型ドライバー



写真手前側が、本機のために専用設計された「φ9mm SOLID BASS HD TWSドライバー」。奥側に見える従来ドライバーに比べて、薄型化と大口径を両立できている。

▶装着性の高いボディ



耳にストレスなく装着できるように何度も試作を重ねた。ドライバーを薄型化して耳珠内側に潜り込ませたこと、ノズルを短くして外耳道に不快感のない構造としたことがポイント。

▶接続安定性も向上



従来モデルと比較して、アンテナ面積を拡大。途切れにくさと正確な操作性を実現した。ちなみにアプリからタッチ感度を調整できる。

▶ニュアンスカラー



イヤホンは身につけるファッションアイテムでもある。特にピンクベージュのニュアンスカラーは、最近のカラーマスクなどをヒントに、何度も調整を繰り返したこだわりの配色だとか。

SOLID BASSらしい重低音再生につながっているのだ。

音質に対するこだわりも随所にある。「小型化だけを考えるのなら、バランスド・アーマチュアを採用するという選択肢もあったが、そうするとSOLID BASSらしいキレのある重低音や伸びのある中高域の達成が難しくなる」（田久保氏）という。マグネットや磁気回路も9mm径のメリットを最大限生かせるよう、再設計を実施したそうだ。

後日、ATH-CKS30TWをじっくり試聴したが、バスのアタックはダイナミック型ドライバーらしく量感があって、余韻の収束もスピーディーだ。それでいてボーカルの定位は明瞭、音場の奥行きも感じられる。ただ低域を持ち上げたのではなく、サウンドキャラクター全体を慎重に練り上げた節があり、それが音楽に深みと奥行きを与えてくれる。SOLID BASSシリーズの面目躍如たるサウンド、これもまた小型化／薄型化の成果だ。

「バッテリーや接続安定性、 防水性や操作感にもこだわる」

音楽再生といえば、ユーザーへの細やかな気配りも効いている。重低音にもさまざまなテイスティングがあるため、今回はイコライザーのBass Boostに「Deep」と「Beat」の2種類を用意して、イヤホンのボタンだけで設定を切り替えられるようにした。専用アプリConnectにも新たな工夫を盛り込み、「音をイメージさせる画像を準備し、パラメーターを5バンドではなく、レーダーチャートで示して、音の変化を直感的に楽しんでもらえるようにした」（大島氏）という。

省電力や通信性能向上といった、Bluetoothイヤホンとしての基礎部分も徹底している。連続約7.5時間再生というバッテリーの持久力は「消費電力が少ないSoCを選んだことと回路の最適化が要因」（高嶋氏）だそうだが、見せてもらったフレキシブル基板を見て深く頷いてしまった。面積を増やすことでタッチセンサーとしての感度とアンテナの電波効率の両方を追求、消費電力を削減する狙いだろう。ほかにもタッチセンサー感度や必要以上の電流が流れている箇所を探し出し最適化したというから、作り込みには恐れ入る。ちなみにス



▶オーディオテクニカ開発陣が総力を結集！

新時代のSOLID BASSを届けるために、ノウハウと情熱を惜しみなく注ぎ込んだ「ATH-CKS30TW」開発陣の皆さん。左からConnectアプリの開発担当の大島克征さん、商品企画担当の永山優香さん、音響・機構設計担当の田久保陽介さん、無線・電気設計担当の高嶋 靖さん。

マホとの通信は左右同時接続で音途切れの心配も少ない。

些事（さじ）徹底という言葉が思い浮かぶが、その姿勢はソフトウェアの分野にも見られる。たとえば、音声通話。相手が何を話しているかわかりやすくするため、抑揚を削ぎ落とさないよう通話のパラメータを設定しているのだそう。自分の声をイヤホンに戻す「サイドトーン」も同様に、イヤホンを装着していない自然な状態に近づけるべく、調整を繰り返したという。

ほかにも、タッチセンサーの長押しでボリュームアップダウンを加速させる機能、最大64ステップの音量微調整、音と映像のズレを抑制する低遅延モードなど、好みに合わせてカスタマイズできる機能が充実。2台のBluetooth機器に同時接続できるマルチポイント機能やGoogle Fast Pairといった最新機能も搭載されている。防水防塵もしっかり、IP55相当だから突然の降雨や汗が飛び散るスポーツにも十分耐えられる。

オーディオテクニカが総力を結集したSOLID BASSの新顔は、よくぞここまで、という作り込みが光る傑作だ。